

陽の里

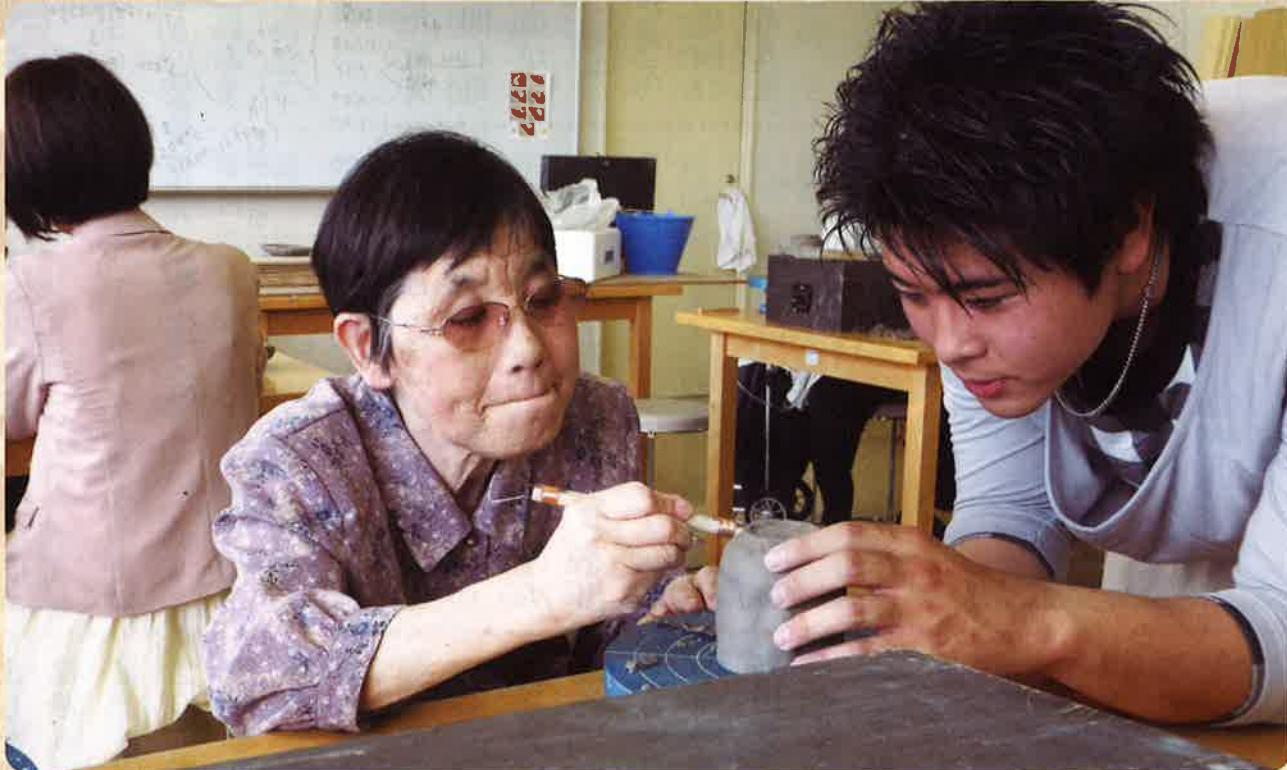
発行 平成26年9月25日



社会福祉法人 新生会
総合ケアセンター サンビレッジ
〒503-2417 岐阜県揖斐郡池田町本郷1501番地
TEL (0585) 45-5545㈹
URL <http://www.sun-village.jp/>

No.121

テーマ 介護のしごとの道しるべ DVD完成
アセスメントとチームケア



▶リハビリセンター白鳥の陶芸教室

「介護のしごとの道しるべ」に期待すること



社会福祉法人 新生会

理事長 今村 寧

かの有名な発明王・エジソンの逸話におもしろい発言があるので紹介したい。エジソンが電球を発明し記者会見の場で、新聞の記者が質問した。「完成品ができるまで、どれだけ失敗をしましたか?」エジソンは「今まで、失敗は一度もしていない。この方法では成功しないことがわかつただけだ。」

彼の言葉を解釈すれば、成功するためにはいかに多くの失敗（とよばれていること）を経験していくことが大切であるということであろう。だれもが失敗はしたくないと考えるが、一つの経験であると正面から捉える必要がある。多くの成書は成功するための方法が書いてあるものが多いが、現場で役に立つものは成功しなかったときにどのように考えていくかである。少數ながら失敗を糧にする本も出版されているが、現場の職員にそれを伝えようとしても、心から理解できるまでには至らないことがあった。

今回、自由工房の協力もあり、介護の質を上げるために一つの道筋を、動画で表現することができた。これが「介護のしごとの道しるべ」である。介護の質を追求するための理解しやすいツールであり、多くの介護職員をはじめ福祉関係者が活用してもらい、安心できる老後を送れる社会ができるることを願っている。

介護の専門性と方向性

介護福祉士の国家資格ができました。

毎日の新聞読みが日課です



社会福祉法人 新生会
名譽理事長 石原美智子

1976年に創設された新生会に、施設長として直接関わるようになつたのはその2年後からでした。それから現在まで、「福祉」とは「介護」とは「質」とは、を考え、手探りし、見える化し、周囲の人々に伝える術を模索する人生だつたと思います。

サンビレッジ新生苑の施設長になる前は、新生病院の経営を手伝っていました。その時に感じたことは、患者さんの一番そばに一番長い時間いる人、それは専門の教育を受けていない家族か付き添いの人でしたが、大きな手術をした人が24時間、例え短い期間でも専門の教育を受けた人が身近にいたらどんなにか回復が順調なのではないかと思ったものでした。

その後、オーストラリアではすべて看護師が担つてることを知りました。

にいたらどんなか回復が順調なものではないかと思ったものでした。

その後、オーストラリアではすべて看護師が担つてることを知りました。

もできる単なる作業だと思われていて、当の介護福祉士自身が自分たちの真の役割に気づかず、医療者に低く見られると悩む姿を見たりします。自身で自分たちの専門性にまだ気づいていないのが現状です。

そんな中でも利用者の尊厳を守り、自立支援を心がけています。すべてとは言いませんが、利用者が見違えるように生活が改善する例があります。それらの事例から、介護の基本は利用者をしっかりと観察をし、それを基にした視点で介護計画を作成し、情報を共有して介護をしたときには奇跡のように利用者の生活

が改善することが分かつてきました。

この度、自由工房の佐藤斗久枝監督による介護者のための教材「介護のしごとの道するべ」の撮影現場になりました。

失敗からも学びながら専門性を高めていく姿、また、本来、福祉はこうでありたいと願う方向性を追求している取り組みなど、ぜひ、ご覧頂ければ幸いです。



▶ 学生と一緒にピアノで弾き語りしています

介護の未来につながる道筋に



元厚生省老健局長
元参議院議員
阿部正俊

石原美智子さんの依頼を受けたこのDVDを繰り返し見た。そこには新しい特養での若い人達の清潔な介護ケアの実践が記録され、ゴールドプランや介護保険の創設などにかかわった経験はあるが、介護の第一線から遠くなつて久しい私には、あたかも、広く茫茫とした介護の未来に確かな方向性を見た思いで眼を見張つた。

介護には、残念ながら今のところ確立された理念や技術論はまだない。もちろんそれも無理からぬことで、65歳からの約20年の人生をほとんどの人が享受し、早い遅い、或いは程度の違いはあるものの何らかの支援が必要な「最終

章の生」を生きる訳で、未知の世界を切り開かなければならず、各自の生き方、或いは社会的対応の両面で今までと違つた視点が必要である。

介護は、医療とは違つて、最終章の生活そのものの組み立てを支えるものである。もちろん、身の回りの世話をあげて終わるものではない。20年前の「措置」の時代はともかく、「生きる」ことを権利として捉え相互支援を理念とする社会保険の今、先につながる実践的技術論の構築が不可欠である。言うまでもなく、今までの福祉論では太刀打ちできず、まだ未開拓の分野である。

サンビレッジには、20数年前「利用契約特養」に挑戦していただきた。それが今の介護保険の「利



▲擬似体験(腕や足に重石をつけ、見えにくいメガネをはめて)さあスタート



▲楽しみな組みひもつくり

用契約方式」に結びついている。以来、石原美智子さんの先を見通す視点とそれを支える豊富な人材によって多面的な技術が蓄積され今日に至つている。

そのスタッフ達（「根拠」を求めるプロであり、笑顔を絶やさぬしたたか者）と利用者が主演し、自由工房の肩肘張らないやさしさで描かれたこの記録が全国のプロおよびそれをを目指す人々になると同じ重さで主体性が問われるることは避けられまい。

あわせて、①特養などの生活支援施設の有効な手立て、②生活支援の技術と人材育成はベースとなるテーマである。そのためには、このDVDに見るよう、新人ヘルパーさんたちの試行錯誤をいとわぬ実践に経験者と他分野から知見を組み合わせるアセスメントとチームケアが王道である。



「介護のじごとの道しるべ」によせて

陽の里



(一財)高齢者住宅財団理事長
国際医療福祉大学大学院
医療福祉学分野教授

高橋紘士

「安心して老いるために」(19)

91)の制作にあたって羽田澄子さんは「もし特養が努力すれば、地域に対しどれだけのことが出来るか。」と問い合わせておられた。

サンビレッジが高齢者ケアニア

ズの展開に誠実に応え、事業が発展していくたまは法人30周年を記念して制作された「陽の里めぐり」(2010)で提示されている。施設経営で完結するのではなく居住サービスの展開、地域づくり、そして、人材育成の拠点の設置など、地域に開かれた事業が社会福祉法人を核とした事業経営モデルとして開拓されてきた。まさに羽田さんの問い合わせに誠実に応

答してきた歩みであった。

介護は、人によるサービスの営みであるとしたら、介護の専門性の追求が事業の核であることはいふまでもない。介護人材を消耗品として扱う介護事業の跋扈のか、サンビレッジでは介護の専門性にこだわってきたということが、今回の「介護のじごとの道しるべ」で明らかにされた。

ケアというものが「主体的モデル」と「客体化＝物象化モデル」に分かれるのではないかと最近考えるようになつた。後者の典型は介護行為を分解し、それぞれの行為を達成することを目的とした「科学的介護」なるものである。



▶ケアコンテスト「介護場面を想定し支援の専門性を高める為のコンテストを開催」

そこでは人の個別性が捨象され、しばしば手段が自己目的化されていく、そこでは介護に関わる当事者の尊厳が軽んじられ、管理の対象として、いわば物象化されてしまう。

しかし、介護とは、虚弱となつたといえどもその人らしい生活を

主張的に追求するための支援の手法であるべきだ。地域生活を継続し、なんらかの事情でそれが困難だとしても、地域や家族と一緒に新人の介護職が成長していくたかという自己形成のプロセスとともに語られている。

このDVDは「人間を取り戻す」尊厳をめざした介護の要諦を学ぶことのできる画期的な作品であり、見るたびに介護のあり方について、様々な発見がある映像がちりばめられている。



生きる力と生き方を支え、 育みあう介護



労働政策研究・研修機構研究員
医療介護福祉政策研究フォーラム理事
(地域包括ケアアイノベーションフォーラム事務局)

堀田聰子

よりよく生き、よりよい最期を迎える。

迎えたい。よりよい仕事をしたい、よりよい社会を実現したい——わたくしたち誰もが持つうる願いや志。このDVDに登場する皆さんは、日々の営みのなかで、そんな思いを育みあい、一人ひとりが自分の生活を支える「当事者」として、生きる力と生き方を支えあつているようにみえます。

物語に通底するのは、そして「アセスメントに基づくケア」を成り立たせているのは、「エンパシー(共感)」かもしれません。双方向の心の働き、「相手への働きかけ」を入れる」という相互行為を意味

潜潜在的な可能性を引き出すチークアは、課題解決だけでなく、ムケアは、課題解決だけでなく、

改善のみならず、その人らしい生



そこで、一人ひとりの利用者を中心、立場や職種の異なる多様なメンバーで、どんなチームをつくるのか、関係づくりのデザインが重要になります。本人を含めたすべてのメンバーが持つ能力や

の関係性を支えるのは、活性化されたコミュニティです。機能の

トピックス

働きながら資格取得をサポート

新生会では、平成22年より働きながら資格取得を目指す「介護雇用プログラム」を利用し、延べ31名の方々が、新たに介護の仕事に就かれました。誰でも最初は未経験ですが、内部研修体制が充実しており、1か月間の先輩のエルダーワーク体制により少しでも不安を軽減し、人と関わる魅力・介護の専門知識を学び国家資格の取得を目指します。制度開始から3年が経過し、昨年は介護プログラムから国家資格にチャレンジされ、4名の介護福祉士が誕生しました。今年多くの方が国家資格に挑戦します。

本年度も、4名の方が制度を活用され新生苑にて、新たに介護の道へ進みます。「能力以上の仕事をすることで、



できないことが出来るようになり、仕事のモチベーションが高くなる職場です」新たな皆様に先輩からのエールです。

医療福祉ごちゃまぜワークショップ



医療福祉ごちゃまぜワークショップを、8月23日、岐阜シティタワー43 新生元気塾にて実施致しました。

内容は、終末期の患者さんや、在宅看取りを経験されたご家族のお話を聴いたり、地域包括支援センターに訪問したりと体験型の企画でした。

参加者は合計18名で、看護学生、高校生、福祉大学生、介護労働安定センターの受講生、専門学校講師など様々で、年齢も10代から60代と大変幅が広かったです。研修生同士の多世代交流も楽しかったです。ファシリテーター役のスタッフも、とても勉強になりました。

今回、大変好評でしたので、次回もバージョンアップしたワークショップを企画しておりますので、お楽しみに!!

～地域の子供達と福祉について学ぶ～

サンビレッジ新生苑で始まり早13年。当初職員の子供さん達に働く親の姿を見て、家庭で見せない親の姿から福祉の現場で働く素晴らしさを感じってもらいたい。そんな思いから始まり、サンビレッジ大垣、リハビリセンター白鳥と広まり、共生社会の構築、福祉を理解する取り組みが益々浸透してきています。

その中でも、この夏サンビレッジ大垣では、障がい体験を通して本人の気持ちを理解し、サポートする専門職等の役割を学びながら、自分たちに何ができるかを考えるきっかけ作りをとキッズセミナーを行いました。1. 食べることで元気に! 2. 飲み込みや話したり、聞くこと。3. 障がいと向き合うために、4. 活き活きと生きること。をテーマに、介護職員、栄養士や、言語聴覚士、作業療法士などの専門職からの仕事の話。実際に普通食、刻み食、ミキサー食を試食し、飲み物にとろみをつけ飲んでみ、特殊浴槽に入るなど福祉体験を行いました。当初1日のみの参加予定の子供から、2日目も参加の申し込みや、キッズセミナー後にボランティアの申し込みがあつたりと、相手の立場に立つことを肌で体験することで自分たちに何ができるかを学ぶ一日になったようです。



編集後記… 機関紙担当者の紹介も、本稿でいよいよ最後になりました。皆さんこれまでに紹介させて頂きました4名の担当者、覚えていますでしょうか?

「笑顔がステキな五十川さん」「微笑みの天使・鈴木さん」「メタボ街道まっしぐら・若園さん」「機関紙の伝説・大橋さん」そして最後に私「怪我の功名・玉城さん」(昨年はアキレス腱断裂・今年は〇〇を体験済)の5名で担当させて頂いております。今後も皆様に旬な新生会の情報を届けできるように楽しみながら進めて参ります。どうぞよろしくお願ひいたします。

